令和元年 9 月 19 日 発行　第 19 号

郷　土　の　か　ぜ

仙 台 市 民 図 書 館　郷土資料コーナーから

沢　　瀉
大　條　家

『地元の歴史に目を向ける』

～板碑から眺める地域の風景～

郷土担当　星　博之

「自分の散策コースにいくつかの板碑のようなものがあるのだけれど、由来がわかるでしょうか？」。ある時カウンターにいると、利用者の方からこんな質問を受けました。とりあえずその場所を聞いてみると、自分の中学校時代の通学路近くではありませんか。薄れた記憶を手繰り寄せていくと、確かに碑石のようなものがあった記憶がよみがえりました。

石碑や板碑に関する問い合わせはたまにあり、参考となる郷土資料もそれなりに存在しますが、個別に由来が解説してあるのは意外と少ないのです。

例えば仙台市史には『特別編 5　板碑』という編があり、市内の数多くの板碑の写真・実測図・拓本にデータと解説論文が収められています。
それによると、仙台市内には 573 基の板碑があったそうで、全国的にも有数の板碑密集地であるとされており、県単位で計算すると、宮城県は東京都に次ぎ全国で 3 番目に多いと記載されていました。そんな地域なので身近にちょっとした板碑があっても何の不思議もないわけですね。

今回のケースも先の仙台市史をはじめ、県史や文化財報告書、郷土資料の板碑が記載されている資料などを丹念に調べてみたのですが、残念ながら板碑の由来の確認までたどり着けませんでした。それでも郷土の板碑や石碑に関する本を紹介すると、その数冊に興味を示され借りていかれました。
結局、今回の板碑の詳細までは分かりませんでしたが、これをきっかけにその地域に対する興味を持つ機会になれば、郷土資料を扱う図書館としてもうれしい限りです。

皆さんの近所や散歩コースに板碑や石碑はありませんか？
それらは当時そこで暮らしていた人々の生活に思いをはせる、とても貴重な郷土史の証かもしれません。
こんなことをきっかけに、当時の歴史を調べてみるのも面白いのではないでしょうか。

市民図書館の郷土資料コーナーには、そんなあなたの知的好奇心を満たす資料がたくさんあります。ぜひ一度お訪ねください。

＜板碑に関する参考図書＞
「仙台市史 特別編 5 板碑」仙台市史編さん委員会／編集　S/212 セ
「中世奥羽と板碑の世界」奥羽史研究叢書　大石直正.川崎利夫／編　高志書院　185 チ
「板碑と修験の中世」高橋克彌／著　創英社　S18 タ
「仙台市文化財分布調査報告　七北田下流域の板碑」仙台市教育委員会　S20.2 セ

紹介されている「仙台市史 特別編 5 板碑」は、ご興味のある方、一読をお勧めいたします。

大橋！　400年のベール

菊池雅人

▲仙台城の大手門跡に立っている。東を見れば、道路は、坂を下って大橋に続き、そこから大坂を上がって大町に達しているのが見える。仙台の中心、芭蕉の辻はその先だ。

だが、江戸初期の道はこうではなかった（仙台城下五釐掛絵図［ゴリンカケエズ］による）。大町から大手門に行くには、まず広瀬川の断崖をジグザグに（北側に折れ、また南側に折れ）下って、木造の大橋（現在よりやや上流）を渡り、川内に入る。そこから、長い坂をまっすぐ上がり、国際センターの南西付近で左（南）に折れ、さらに右（西）に折れて、ようやく到達する。つまり、このメインストリートは現在の道より北にあったはずだ。

ところで、この大橋は厄介な橋だ。現在の橋は1938年にできたもので東北大や八木山に通じる路線としてひっきりなしに車が通っているが、そもそもは、青葉城と仙台城下をつなぐ最も重要な橋として、1601年に架けられたとされている。だが、仙台市史によれば、幕末期まで水害のために12回も流失や破壊があったらしい。

▲この大橋の“下”は、曰く付きの場所でもある。ここにキリシタン殉教碑（1971年設置）があり、江戸幕府によるキリシタン弾圧の一環として1624年2月18日と22日に行われた“広瀬川の大殉教”が記されている。ポルトガル人神父カルバリオ他8名が、川岸に作られた深さ二尺の水牢で棒杭に縛り付けられ、18日には2名が、22日には生き残った神父他6名が再び同じ拷問にかけられ、全員が転宗することなく凍死した。死骸はそのまま川に流されたという。その場所が“大橋下”（石母田文書）である。

拷問はもちろん裸で下半身は水の中、想像するだけで身震いするが、川の温度はどの程度だったか、自分で調べたことがある。殉教日に近い2月5日（2011年）、実際に広瀬川で温度を測ってみた。大橋直下のよどみの所で3度8分、流れが幾分強い少し下流では3度1分だった。参考ついでに、自宅の冷蔵庫は6度8分、またかつての西公園プールは22度に管理されていた。宮城教育大学の棟方教授等の研究「広瀬川中流域における水温の日周・季節変動」には、牛越橋近辺において0度7分との記録がある（2004年1月15日）。400年前の広瀬川は凍り付く寸前の温度だったのではないか。

▲ところで、彼らは牢屋に収容されていたはずだ。仙台市史によれば、評定所（1636年設置、現在の橋などにその名を残す）の付属施設として牢屋が設置されていたとある。評定所は、1645年の地図（『仙台地名考』）で見ると現在の「森の菓本舗」（和菓子屋）の東斜め向かいにあり大橋とは反対側にある。ただし、ここは琵琶首の首根っこ（当時の広瀬川のもっともくびれていたところ）の東端で、真西に行けば大橋の下流200メートルの河原に着く。実際歩くと3分半程度で、罪人を連れていくにも近いし、そのほうが評定河原より水牢を作りやすかったのではないか。東北大学の村岡教授も大橋下を“しも”と解釈したというが、ちょうどこのあたりが大橋下の殉教地だったかもしれない。

▲神秘小説『最後の奇蹟』（青山圭秀 著）の冒頭が、この殉教の場面である。市民プールがあったころまでは、この殉教碑は自然に目についたが、今は訪れる人をあまり見かけない。

■　編集後記

暦の上では秋、でも暑さだけは大変厳しく残っています。そんな中でも多くの方々に郷土コーナーを利用して頂いています。過日、カッパ祭りの調査から郷土料理「ろばた」の初代店主でした故・天江富弥さんの資料が見つかり、中を見たら「ほや」や「山菜」などの郷土関係資料の記載がたくさんありました。後日、ご紹介することにいたしましょう。

発　行：仙台市民図書館　郷土資料コーナー　（担当：小石川）
〒980-0821　仙台市青葉区春日町2-1　せんだいメディアテーク内　℡　022-261-1585